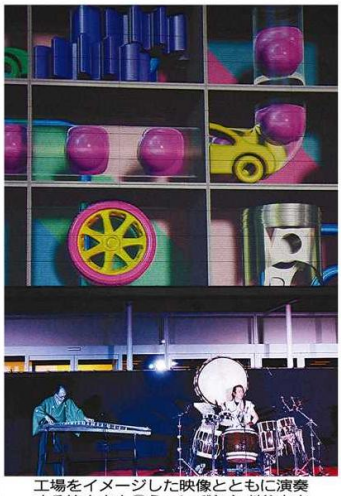
2022年03月15日 中日新聞 朝刊 19頁

四季や刈谷の姿を投影

HWオアシス　愛教大生や市職員、映像考案



工場をイメージした映像とともに演奏する笛木さん（右）ら＝いずれも刈谷市東境町の刈谷ハイウェイオアシスで

新型コロナウイルス感染拡大で失われた四季の楽しみや刈谷市を表現した映像を建物壁面に映し出すプロジェクションマッピングが十一日、同市東境町の刈谷ハイウェイオアシスで始まった。四月三日まで毎日、午後六時半～九時に楽しめる。荒天中止。（神谷慶）

大観覧車近くの「セントラルプラザ」壁面に高さ八・四㍍、幅三一・七㍍にわたり、五分間余の映像を十～二十五分おきに投影開始。内容は地元の愛知教育大生有志と市の若手職員有志のアイデアが基となっている。映像に登場する亀城公園（城町）の桜や「刈谷わんさか祭り」の花火には「コロナ禍でかなわなかった外出の楽しさや季節の移り変わりを感じてほしい」との思いが込められている。トヨタグループ創始者の豊田佐吉らが刈谷に営業試験工場を置いた自動織機、県無形民俗文化財「万燈祭」、自動車関連の工場、大観覧車なども出てくる。

十一日夜に開幕式典があり、映像の音源を担当した邦楽ユニット「あらまほ」が出演。主宰する和太鼓奏者・笛木良彦さん（三七）＝刈谷市＝ら三人が映像と同時に、しの笛や箏も交えた生演奏を披露すると観衆から「すごい」の声が漏れた。

映像の合間には、市内の三十五幼児園・保育園から集めた園児たちの笑顔の写真が投影される。稲垣武市長は「この地域の過去、現在、未来を表した躍動的で幻想的な光の演出とともに、子どもたちの満面の笑みが私たちを元気づけてくれるはず」とあいさつした。

コロナ禍で苦しむ市民らを励ますと、二〇二〇年度に迎えた市制七十周年を引き続き盛り上げる市の「プラス1（ワン）事業」のメイン企画。伊勢湾岸自動車道「刈谷スマートインターチェンジ」の開通（二十六日）にもちなんだ。付近のオアシスステージ前階段でも、来場者が段を上るのに合わせて光が動き音が流れる演出が楽しめる。

人の動きに合わせて変化する光に彩られた階段

（c）.中日新聞社　無断転載、複製、頒布は著作権法により禁止されています